

日記ろまん

第60号

女性の日記から学ぶ会
代表 島 利栄子

〒276-0046
千葉県八千代市
大和田新田 469-123
TEL・FAX 047-459-9464

事務局

日記の力・庶民の歴史が今ここに

十八周年のつどい・堂々開催！

女性の日記から学ぶ会では、六月七日(土)、八千代市八千代台東南公民センター五階ホールにて「十八周年のつどい」を開催しました。当日は梅雨入り後の激しい雨の日となりましたが、「介護日記」の講演、昨年に続いての公開トーク「聞かせて あなたの戦中戦後」、展示と盛りだくさんの内容に、会場は百名もの参加者を得て、熱く、賑やかに盛り上がりました。

◆ 島代表挨拶

総会では前年度事業報告、予算報

告、今年度事業案、予算案が承認されました。つどいでは、島代表が昨年の活動として



会場には全国から大勢の入場者が訪れた

①「吉田得子日記お里帰り展」②NHKラジオ深夜便への出演③青年部による「聞かせて あなたの戦中戦後」の三つを挙

告報「日記ろまん」に「夫の介護日記 新たな出発のとき」を連載し好評を博した鈴木美佐子さんが講演されました。誰にとっても身近な介護体験を赤裸々に語られ、会場からは「身につきました」「参考になった」「共感の声が寄せられました」。

◆ 講演「介護日記の連載を終えて」

げ、その反響の大きさを振り返りました。続けて「再来年の二十周年に向け日記目録、日記熟読集編の作成を目指し、会員一丸となって取り組みたい」と熱く語りました。



◆ 公開トーク第二弾

今年のテーマは「戦中戦後 生きた書いた」と題し、塚本昌芳さんに青年部が聞き取りをした成果を、重厚な配布資料とともに披露しました。

昨年に引き続きの戦中戦後に焦点を当てた企画ですが、九十五歳の塚本さんの豊饒とした話しぶりと青年部の熱心な取り組みに会場からは大きな拍手が寄せられました。世代間の譲りを実感したひとときでした。



資料展示に見入る入場者

秋葉八千代市長も参加

開会式には、秋葉就一八千代市長が出席されました。秋葉市長は「叔父・師岡一郎は日記の会で大変お世話になりました」と、当会との縁にふれ、「庶民の生活の歴史を日記で残して保存するという活動は、大変貴重です」と挨拶されました。



秋葉市長(右)と島代表

聞かせて あなたの 戦中戦後

◆戦争中の活動への思い

女性の日記から学ぶ会「青年部」が昨年から取り組む公開トーク「聞かせてあなたの戦中戦後」二回目は、塚本昌芳さん(九十五歳)。戦後、昭和二十年代をどう生きたか、昭和四十年代めじろ台での町づくりについて尋ねました。聞き手は小園崇明、比江島大和、舟津悠紀、伴野文亮、田中祐介さん。一戦争中に書いた日記(冊)(展中)について

近衛連隊からインドネシアへの船中があり、両親が空襲のときに持つて逃げてくれて無事でした。戦争中も日記は書いていました。

一中国での活動や、敗戦後インドネシアでの活動に参加した理由

中国の民衆のために、戦中は宣撫官(占領地の人に本国政府の方針を知らせる心安定させる仕事)となり、敗戦後は、インドネシアの独立に関わりました。東亜の新秩序を果たし、新し



塚本昌芳さん

心安定させる仕事)となり、敗戦後は、インドネシアの独立に関わりました。東亜の新秩序を果たし、新し

公開トーク 青年部、塚本昌芳さんに体当たり



公開トークの様子。中央が塚本さん

い日本を作りたいと思っていました。一戦友の供養について(一九五二年の日記)

軍隊で頼りになった戦友への思いは深く、自分が生きている限り、その家族をなくさめたいと思いました。

一マッカーサーをどう思っているか
後に天皇への敬意から日本を許してくれた対応は見直した。(国鉄勤務中)国鉄のストがマッカーサーの一言で中止になったのが印象に残っています。

◆戦後の印象深い出来事

一佐藤栄作と五島慶太の思い出を
佐藤さんは義侠心に厚く、私の友人が鉄道次官とトラブルになりそうなど

塚本昌芳さん

1919(大正8)年、長野県諏訪郡宮川村高部(現・茅野市宮川高部)生。昭和16年中国に渡り宣撫官、その後近衛歩兵連隊入営、1943(昭和18)年インドネシアのスマトラ島で敗戦。戦後は鉄道本省、洋食店経営、不動産業などに従事。1968(昭和43)年から八王子市のめじろ台住み、まちづくりに関わる。

きとりなしてくれたことがあり、総理の器でした。五島さんは仕事のとき塚本、今月は交際費いくら使った!金も使えない奴が仕事ができるか」と太っ腹な人。私の叔父が事業の手伝いをしていました。

一八九四年に貸本屋を開いた小学生だった妹達が活字に飢えていたので、心の糧を与えようと始めました。「青空文庫」と名付け繁盛しました。

一八九六〇年代めじろ台での活動
五十歳で退職し第二の人生を、当時京王電鉄が開発しためじろ台の住宅でと応募した。ひと月前から掘立小屋を建て、行列ができる人気で、順番取りの自治体ができただけです。町会活動で理想の町づくりを力を注ぎました。

◆
塚本さんは「裸になってお話しする覚悟でした。青年部の皆さんはよく研究し熱心でした」と述べられました。

国民学校の修了証書

戦前の小学国語読本

塚本さんの町づくり

戦前の女学校の通学簿

公開トークを終えて

一年にわたる「聞かせて あなたの戦中戦後」を振り返って、昨年参加し



昭和16年上野公園にて塚本さん

た西村榮雄さんと松本喜美子さんの感想をお聞きしました。西村さんは、手紙の検閲について振り返り、「二十歳の自分の手紙を勝手に開けられたことにとても腹が立った」と語られました。松本さんは「これからの社会は次世代の人が自分の責任において決めなければと思います。そのために、私たち戦争経験者は防空壕での爆撃のつらさ、敗戦直後の惨状、人間が極限で生きようとする力を伝えていきたい、そして戦争が本当に怖くて悲惨であるということを伝えたい」と話されました。

「日記ろまん」陽記妃に感謝

「日記ろまん」

創刊以来十七年間編集を担当した「陽記妃」こと清水幸子、上條祐美、柳川智恵さんへねぎらいの花束が渡されました。新編集担当は東京創作出版・永島静香（会員）が引き継ぎました。



鈴木美佐子さん講演

講演



私の主人は手足の麻痺はないものの、脳に障害を受け、言葉が伝わらない。脳



鈴木 美佐子 さん

千葉市の公民館に勤務。平成16年、クモ膜下出血で突然倒れたご主人（当時53歳）を介護中。介護日記を「日記ろまん」にて平成22年から12回連載し、反響呼んだ。

介護では楽しいと思えることが大切

が壊れ、人間ではない状態になりました。当初はうがいも鼻かみもできない、トマトを見ても食べ物であるかわからない、という状態でした。しかし介護しながら共に生きるなかで、時間をかけて、夫は頭の中が整理され始め、人間になってきました。

主人は凝り性で、テレビのリモコンは定位置にないとため、ボタンは首からさしちんとしないとため、好きなDVDは繰り返し見て飽きない。そんな様子を身近で介護しながら、私はだんだん「この人面白いな、今何を考えているんだろう」という気持ちになってきました。今では主人も自分の行動を少しずつ抑制できるようになってきています。



鈴木さんの介護日記。連載をまとめた冊子も展示

る時間を「天国」と感じ、友達との時間や仕事での時間が至福のように感じます。この当事者しかわからない介護のことを、何らかの形で皆さんに伝えたいと思い、介護日記を続けました。病人には寄り添って生きていきたい。感性が豊かであれば上手に寄り添うことができます。と信じています。

展示資料

今年も充実、歴史を語る品々



戦中戦後の日記、写真

公開トークの塚本昌芳さん、昨年参加の西村榮雄さんと松本喜美子さんの資料も展示されました。

近衛兵時代の塚本さん



スタッフの皆さん
ありがとうございました



昭和二十年の 平野仁蔵日記 を読むⅡ

村松 洋一

前号に続き平野日記の戦争終結から歳末迄を紹介したい。この時期、氏にとつての最大の事件は終戦、そして再就職であつた。

事柄別に二、四と章を立てて拾つていきたい。※部が私の所感。日記本文は「ムヘー」女性の日記から「字々云」の「わいらい日記」を参照されたい。

1 戦後の所感

私的不安と公憤とがない交ぜに記される。やがて公憤は収まり私的不安と安堵感と希望とが交錯し出す。

● 八月十六日 昨晩は警報の心配もなくのうとうと眠り得る筈だったが、胸中悶々として安らげき夢を結び得なかつた。(略) 此の仇、必ずや果さずして置くべきものぞ。吾が神國の神にして真に我等を護り給ふ事有らば

何時の世にかは必ず必ず。

● 八月二十日 吾等は幸福なり。

● 九月一日 今日からは已に職なき天涯のルンペンと化した訳だ。だが失望する易かれ。

● 九月三十日 (略) 我等が今後の生活の果して如何になり行くかを思へば些が胸中不安なきにしも非ず。されど現実には兎角戦後の安慰感のみ。

● 十月三十一日 (略) 我等が胸中は正直の所、未だ一種の星雲状態を脱してゐないと云へやう。風のまにまに流れる、水のまにまに漂ふ如き心的状態であり(略)。

*氏の独身である事、「食」の不安が少ない事(宇都宮在の実家が農家である)、親戚とおぼしき東京の二軒の家の存在。これらがあつて、「天涯のルンペン」の言葉にも若干のユーモアが感ぜられるがどうだろうか。

2. 彷徨、散歩

就職の日までの二ヶ月間、独身の気ままな彷徨散歩がある。実に十一回さほどの用件の記載もなく巷を歩く。先の所感の生れる所以か。

● 九月三日 焼跡の露天商に群る雑踏など眺め四谷見付迄歩き、公園の荒れ果てた雑草を踏んで漸くベンチを見出して一休み、六時帰宅す。

● 九月八日 (略) 市ヶ谷に下車、靖国神社に参拝。(略) 焼け残りの神田街を歩き、更に電車で本所、錦糸町迄行く。錦糸公園にて晝食。厩橋の



日記原文(昭和20年8月15日・16日)

斎藤様の焼跡迄行き、歩を進めて隅田公園に歩を進む。戦災者の墓地に來りて唯暗然たるのみ。浅草迄を一巡、夕刻帰宅す。

● 九月十九日 上野、浅草辺、隅田公園など散歩して夕刻帰宅す。

● 九月二十九日 家に居ると倦き倦きせる故、中食分迄の飯を腹に満たして、市内ぶらつきに出掛く。上野、浅草、隅田公園と廻り歩き疲れたり。闇売りの小商人と米国兵の氾濫(略)。

● 十月一日 神田、銀座、日比谷と廻つて街の雑沓を眺め、疲れて帰宅。

● 十月七日 進駐軍の氾濫する市内を一巡し、疲れ果て三時帰宅。

● 十月二十五日 (略) 近々一定の職に就かねばならぬ故今の内に十分街の方々を見て歩いて置かう。上野駅、浅草迄歩いて行つた。(略) 食物の闇屋が多い。人だかりと見れば即ち、芋、林檎、栗、マンヂウ、大豆飴等々、値段は何でも一寸口に入れる位で五円で

ある。芋四片が五円、飴一個参円、林檎四個十円は未だ安い。浅草観音様前の中店には全く身動きも出来ぬ雑沓である。絶えず人の群れの中を歩いて居ると兎角斯ふいふ場所には厭はしく感じられて、直ぐに隅田公園に人を避け静かに一ふく吹かして帰路に就く。帰りは言問橋から鶯谷駅迄焼跡の蕭々たる通りを歩いて来た。此の辺は三月十日のあの最も凄惨な被害を現出した時の焼跡で、バラックとて殆どなく、全く惨憺眼を蔽はしむるものがある。

● 十月二十九日 品川方面：泉岳寺を経て高輪：更に往年二ヶ月許り過ぎた(略) 清正公前の山口米店の所へ來りて此の辺の幸に災禍を免れしを喜ぶ。

● 十一月一日 (略) 気晴しの為街の中へ流れて見た。人の混み会ふ所はもうこりこりと云ふやうに感じるが然し結局、人の居ない所に行つても仕様のないもので、矢張り行く先は何れも雑沓身の置場もなきが如き所である。

*複雑な思いを抱きながら、好奇心旺盛に巷を歩く氏の姿が彷彿とする。

3. 帰郷

この間三回の帰郷をみる。帰省は精神的慰労と食糧補給そして就職報告であつたろうか。

● 九月十日・九月十一日 未明起床。浅草東武八時発にて(略) 八時少し過ぎ、懐かしき実家に着いた。(略) 疲れも帰省当日は忘れるのが常で、十時

頃迄雑談に過ぎ(略)。

● 十月十二日～十八日 父と母と自分と三人揃ひて山へ栗取り。七十を越した老親も自分と一緒に山を歩き数に入り、栗を取る元気に些か子供心に帰って嬉しくなった。夕刻迄に四升余りの栗を取り(略)。父と母とは二人係り故大体八升位。かくして栗飯の食事が出来る。

● 十一月十六日～十一月十八日 四時三十分(略)。已に父も母も起きて朝餉の用意をなし居たり。リュック一杯の大荷物を負ひ一番のバスに乗車。汽車は混雑の上に、貨車、然も無蓋車に乗りし故、埃と人波にムシヤクシヤとなる。三時頃帰宅。



平野家6人兄弟。昭和16年9月旧盆墓参に帰省して。仁蔵さん後列左より2人目

4 再就職

そのいきさつを追ってみよう。先ず、「英書」の記述だ。多分英会話の本のことだろうが九月から十月にかけて「英書」は日記に七回登場する。この時期の新聞(ここでは「読売報知」)の求人広告では簡単な英会話が出来る事との要望は多い。でもこの道は氏にとって簡単ではなかったようだ。機械廻りの仕事で就職の道と判断していたフシも見え隠れする。

● 十月四日 五反田の戸口製作所の工員募集に行つて見る積り。

● 十月二十八日 進駐軍の勤務に出て見やうか(略)。

● 十月三十日 陸王内燃機工場に赴く、已に工員希望の者は詰め居り、自分の番札は六十一。

● 十一月二日 進駐軍の雑役に行く可く四時頃電気コンロにて飯を炊き、朝飯は済して見たが、外はまだ暗いし、それに小寒さを感じ鼻詰りも癒らず、果して如何したものかと暫し思索して見たが断念して再び床に潜つて了つた。陸王内燃機工場より履歴書送付されて採用漏れの通知配達さる。大方年齢の關係ならん。(略) 日立製作所亀戸工場にて工員募集をなして居る故年少し前頃出て行きし所(略)五日に来社あり度しとの告知。

*行く前になんだかんだでやめてしまつたり、年齢の關係なら

んと得心?したりで、一ヶ月がたつてしまふ。

● 十一月六日 五時起床、朝食も忙しく石川島深川工場に赴く、八時半頃入門。身体検査、試問等を終りて入社採用との決を受け、午後二時工場を出づ。「失業者」の忌むべき名称も一応は拭い去られし形。(略)。

*十一月六日の「読売新聞」に左の広告がある。募集 千名、四十歳まで、職種・待遇等が記載されている。



戦後年末までの同紙を一覧してもこんなに多人数採用の広告は希である。前日には当時の職安から企業向け告知として「多少に拘らず復員軍人を先ず採用してください」の掲載もある。

工場労働者として職種は様々。当日多分夜勤を含むことは告げられたであろう。氏の人生を先走つて述べれば、この就職で得た、「造船機装」が定年までの職場となる。日記の記述から見ると通勤時間は片道約一時間半。週替りの夜勤(午後八時深夜十二時迄)もある。

● 十一月八日 初の出勤。仕上機装の現場へ着く(略)。午前中は職場の配置其他にて過ぎ、午后より仕事に就く。

く。長安丸に入り機関部の修理帰宅は六時頃。

● 十一月九日 五時起床。朝食して遅刻せぬやう石川島迄馳せつけるのは仲々容易ではない。

● 十一月二十一日 夜勤の朝帰りは仲々いいものである。人が皆働らき出る忙しい朝の空気の中に悠々と帰って来てゆつくり落付く! これが一週間交互に繰返されるのが現在の生活である。

● 十二月二十三日 昼勤替りの日曜出勤。初雪。(略) 休み度き心山々なれど励まして出で来る。幸ひ天気は恢復、暖かくなれり。日曜故仕事も只形許り少し丈やりて(略) 大部分は休養と云ふ有様なり。

*作業の繁閑は機装職場の特殊性でもある。仕事への思いは不満よりもながしかの満足感が窺える。

● 十二月十四日 本日帰宅際に工場所より賃金の改正に就きて話あり。吾等も物価高に即して支障なく生活を保障さるゝ訳。

● 十二月二十九日 給料三百三十五円五十九銭也といふ自分に取つては生れて始めての高額給料を懐るにして帰る。

*「石川島社史」によればこの月全従業員平均三百二十円とある。

● 十二月三十一日 三十九才の年も暮れたり。敗戦の師走は唯、喧噪と混乱を感じるのみ。人生不惑に入る。大いに心眼を開き活躍せざるべからず。

連載

1

私の読んだ平野仁蔵日記

田中 順子

昭和二十七年

四十五歳(上)・結婚の年

私は平成十四年三月一日入会以来、平野仁蔵さんの最晩年を同じ会員として身近で感じていた。私には小島富七日記、本山志つゑ日記の読み解きが一段落した後、平野仁蔵日記班に入っていた。

七十余冊もの膨大な日記から、班員各々が自分に興味のある年代の日記をアトランダムに読んでみようということになった。私は、結婚して家庭を持つ

た平野さんの日記に興味を持ち、昭和二十七年、三十、三十五、三十八、三十九年に取り組んだ。この時代の日記は、結婚して家族に囲まれ、平凡だが、安定した生活が綴られていく。

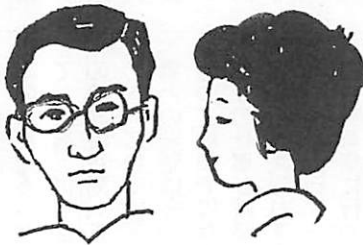
まず今回の昭和二十七年は平野さんが結婚をした年。なお結婚は十二月十七日である。ここでは一月一日と十二月三十一日の記述を比較して、平野さんの心境の変化を読み取ってほしい。

一月一日には「四十五年の内最も物足りない正月」とあり、十二月三十一日には「自分にとつて恐ろしくあるまいと思つ満たされたお正月(略)」と記されている。

人生の伴侶を得て生活者として実生活を生きていく平野さんの変容を見守りたい。



田中順子さん



仁蔵さんと妻の勝美さん
(田中さんが描いたイメージ画)

人生の伴侶を得て生活者として実生活を生きていく平野さんの変容を見守りたい。

昭和二十七年一月一日		昭和二十七年十二月三十一日	
日	記	日	記
1	朝、早く床を起す。中野に行き、坂井の叔父に送金。陶器店にて正月用の四ツ重ねを求む。(略) 買物も、支払いも万端終り、明日は、正月を迎へる訳だ。整った部屋に二人して瓦斯ストーブを炊き、狭い牢口に落着く場を見返して、先づ第一に脳裡に浮ぶのは正しき両親であった。四十年間、片時も忘るゝ事なく我に心をかけて呉れた其親は、自分がかく社会人として一人前に、態様を整える迄遂に生き永らへて呉れなかった。(略) 此の年を終り、自分にとつて二度とは恐ろしくあるまいと思ふ満たされた正月を明日に控へて、只一つ心に残るのは、返すゝも両親の亡き事である。除夜の鐘を床の中でききつゝ、眠る。	31	朝、早く床を起す。中野に行き、坂井の叔父に送金。陶器店にて正月用の四ツ重ねを求む。(略) 買物も、支払いも万端終り、明日は、正月を迎へる訳だ。整った部屋に二人して瓦斯ストーブを炊き、狭い牢口に落着く場を見返して、先づ第一に脳裡に浮ぶのは正しき両親であった。四十年間、片時も忘るゝ事なく我に心をかけて呉れた其親は、自分がかく社会人として一人前に、態様を整える迄遂に生き永らへて呉れなかった。(略) 此の年を終り、自分にとつて二度とは恐ろしくあるまいと思ふ満たされた正月を明日に控へて、只一つ心に残るのは、返すゝも両親の亡き事である。除夜の鐘を床の中でききつゝ、眠る。

(昭和二十七年一月一日) (昭和二十七年十二月三十一日)

●昭和二十七年一月一日(火)
 ゴンゴーンと除夜の鐘の音を聞いて暫く経つてから眠りに就いた。四時に目を覚まし明るくなるまで眠られずにいたが、再び寝入つて八時頃までぐっすり寝過してしまつた。
 こうして一九五二年は明け放たれた。(略)
 父母の霊前にお粗末ながら雑煮と菓子供へ、自分も元旦の祝儀の雑煮を口にしました。かかる時、直ぐに思ひ出されるのは矢張り両親である。今は平和はよみがえり、物足り、自ら若干の余裕を来し、客観的には最上の正月と言ひ得るのであるが、然し自分にとつては四十五年の内、最も物足りぬ淋しい正月であらねばならなかつた。
 ●十二月三十一日(水)
 朝は早く床を起す。中野に行き、坂井の叔父に送金、陶器店にて正月用の四ツ重ねを求む。(略) 買物も、支払いも万端終り、明日は、正月を迎へる訳だ。整った部屋に二人して瓦斯ストーブを炊き、狭い牢口に落着く場を見返して、先づ第一に脳裡に浮ぶのは正しき両親であった。四十年間、片時も忘るゝ事なく我に心をかけて呉れた其親は、自分がかく社会人として一人前に、態様を整える迄遂に生き永らへて呉れなかった。(略) 此の年を終り、自分にとつて二度とは恐ろしくあるまいと思ふ満たされた正月を明日に控へて、只一つ心に残るのは、返すゝも両親の亡き事である。除夜の鐘を床の中でききつゝ、眠る。

わたしの 一字日記 9

古川喜代子



平成二十四年一月二日(日)

いかに寝ておくるあしたにいうことぞ
昨日を去年と今日を今年と

小大君 後拾遺集 春上・一

例年書いていた賀状の太伴家持の歌を今年はお大君(こだいのきみ)の歌を書く。昨秋NHK学園講座の「神作光一平成新撰百人一首」の四十八番目の歌だ。シャッターチャンスといい一首ですと神作先生は解説された。

一字日記 君

平成二十四年二月二十五日(土)

万葉集の会で出会った金沢の俵世婦著のエッセイ集『満天星咲きて』『満天星ふたたび』がシナジー出版社より届く。「自費出版は、人前で裸の自分をさらけだす勇氣と覚悟が必要」と、アドバイスをくれた人。

一字日記 咲

平成二十四年三月三十日(金)

今週から源氏物語の講座は「関屋」の巻に入った。空蟬の登場で、全巻七九五首の歌を復習。独詠歌・贈答歌・唱歌に分別。今年には古事記の編纂から千三百年余。八年後の日本書記の完成。講師はテーマ外のことも触れて

くれ、古典の一貫性がよくわかり、益々興味湧く。

一字日記 蟬

平成二十四年四月三日(木)

一昨年百人一首十四番の河原左大臣の歌のことを『嘉麻の風』に投稿した。偶然だが塩釜の鈴木さんも同一人物の源融が塩釜と多賀城に在任中の逸話を同じ号に投稿されたことから交友が始まり、昨年の東日本大震災の慰問を兼ね、嘉麻万葉を学ぶ会で、四月二十二日から三日間、多賀城万葉講座ツアーを企画してくれた。お土産に、万葉歌の葉を三百枚作った。心はもう陸奥への旅へと飛んでいる。

一字日記 融

融

平成二十四年五月十八日(金)

夫がかかりつけのS病院へ糖尿病の食事療法で一週間入院した後、主治医の紹介で循環器科のある千葉Mセンターへカテーテル検査の予約に行った。担当の女医さんに即入院を勧められた。入院準備品はレンタルにし、日用品は売店で済ませた。検査入院は一週間の予定。

一字日記 循

平成二十四年六月三日(日)

十七年前、地下鉄サリン事件が起き、

犯人の女性が一人今日逮捕された。

娘夫婦はその事件の一年前の六月、東京の椿山荘で結婚式を挙げた。事件の起きた日、椿山荘から、記念の食事に招待され二人で出かける予定だったが、体調が悪く行かなかった。

もしあの日電車に乗っていたら……。今年の五月に、孫は十七歳になった。

一字日記 逮

平成二十四年七月三日(火)

全国組織の和装教育推進の団体に所属して四年目。今年の四月から中学校の技術家庭科の教科書に和装教育技術部門の指導が追加され、私たちも忙しくなった。

今日から三日間の予定で、S中学校三年生六クラスの生徒にゆかたの着方ときものの知識・マナーの授業開始。スタッフ四人。午前午後の九十分授業。ミルクだけの給食しか知らない私は、生まれて初めて学校給食を味わった。

一字日記 給

平成二十四年八月十一日(土)

匝瑳市出身の俳優地井武夫さんが六月二十九日に亡くなり、「ちい散歩」で活躍したテレビ局が思い出をありがとう！という追悼番組を放送していた。

在職時、生徒で、地井さんのお姉さんの世話で日活撮影所に「太陽にほえろ」のロケ現場を見学した思い出がある。

一字日記 武

平成二十四年九月十九日(水)

BSプレミアム「極上の美の饗宴」を観た。江戸時代末期の日本画家鈴木基一の「朝顔絵屏風」二双がメトロポリタン美術館に所蔵されているという。江戸サムライブルーという見事な青色は、百五十年前に描かれたとは思えない見事さ。

一字日記 基

平成二十四年十月十九日(金)

祝・金婚の金文字と贈り主の娘一家の名前入りの立派な掛け時計が届いた。手間と時間をかけて。時計の色・形・時を知らせる十二曲のメロディーも二人の希望を叶えてくれた。至福の日。

一字日記 金

平成二十四年十二月三十一日(月)

正月来客用の水炊き鍋の食材の買物とATMにも寄り通帳記帳を済ませます。恒例のNHK番組を見て、除夜の鐘の百八つの音に煩惱を沈め、辰年に感謝し希望を持って、新しい巳年を迎えたい。

金鐘

一字日記 鐘

(解説)

後一回の掲載ですが、最後まで気を抜くことなく頑張りますので、応援よろしく願います。



★六月七日「十八周年のつどい」ではお世話になりました。日頃、公民館でお話しするのと違いドキドキしました。夫の介護という極めて個人的な話なので、どこまで正直に話すのがよいのか、また理解してもらえらるのだろうかというふうに迷いました。が、実際に壇上に立つてみると、考えてもいなかったことまでしゃべったりして、自分でも驚きました。皆さん喜んで頂けたとのこと、よかったです。

(千葉市・鈴木美佐子)

★つどいは大盛会ですばらしかったです。特に九十五歳の塚本昌芳さんとサポーターする若者たちの掛け合いは誠に見事。会の活動の成果の一つと実感しました。塚本さんと秋葉市長と一緒に写真ありがとうございました。私はアメリカのタイラー市からの訪問団受け入れで連日忙しくしております。八千代高校生徒の対応に市内若者の成長を実感し嬉しかったです。若者も老人も住み易い八千代になってほしいものですね。

(八千代市・山田桂三)

★準備の行き届いた活気のあるつどいに参加させて頂き楽しい時を過ごすことが出来ました。記念の写真もありがとうございました。塚本さんのしつかりされた様子には感心し、たくさんパワーを戴きました。塚本さんは吉

見義明さんのご本『焼け跡からのデモクラシー』もさつさとお読みとのこと、私も購入しましたがなかなかかどりません。鈴木さんのお話も感動的でした。経験しないとわからない介護のご苦労と思いますが、ご主人様への深い愛情が感じられ最後は自分自身を大切に生きていきたいとおっしゃられたので本物だと思いました。私も現在八十七歳、これ以上一人で店を続けて急に何かあったら娘にも迷惑をかけると思う、八月末を以て店を閉める決心をしましたので大変です。生活がかわつたら健康管理に気をつけねばと考えております。来年も又お会いしたいものと考えております。

(前橋市・伊藤伸子)

★「日記ろまん」五十九号、相変わらず内容がいっぱいで勢いのある紙面ですね。二十六年度活動予定も充実しています。よほどうまく運営されておられるのか、感心します。一度例会やイベントに参加させて頂きたいものです。

(豊中市・阿部 健)

★「日記ろまん」五十九号の「昭和二十年 平野仁蔵日記を読む」は同時代に青春まつた中にいた私と重ね合わせて追憶しています。特に八月十五日への筆者・村松洋一氏の記述「八月十五日の平野氏の記述『屈辱・報復』は私的感懐が、公的表現が。両者の混在が『昭和史』にとり大事な視点です。この思想に私も同感。深く感じ入っています。

(京都市・大野英美子)

伝言板

★今後の予定

○十一月十一日(水)研修会・少し早い忘年会。場所は市川周辺。

希望者は片岡事務局長へ。TEL 090 660386743

○十一月十日(水)定例会。史料班。八千代市男女共同参画センター

十三時より

○一月十四日(水)定例会。公開トーク「聞かせて あなたの戦中戦後」

場所・時間同じ

○二月十八日(水)定例会・第七十七回日記塾「松崎宗子日記を読む」

松崎日記班。場所・時間同じ

★会費納入をお願い致します

振込先「女性の日記から学ぶ会」島 利栄子

郵便振替口座番号 0011000351560

入会金：千円 年会費：二千円

★新入会員(願不同・敬称略)

鈴木せつ子 西尾市/山内靖久 東京都/米山勉夫 千葉市/後藤康行 東

京都/桑田隆 八千代市/大野登久子 千葉市/秋葉就一 八千代市/浜岡

香田 尾道市/山中齊 市原市 (会員数三百三十人)



★陽記妃より スタッフだより

『世の中は澄むと濁るの違いにて』そのあとに『福に徳ありふぐに毒あり』とか『刷毛に毛がありはげに毛がなし』などと戯れる。濁点のあるなしで意味が変わる日本語の遊びだ。これは朝日新聞二〇一一年十月四日付の天声人語である。私にとって天声人語は季節や時事を学びひとときの憩いとして愛読していたが、感動した記事覚えていられなくなり三年前から筆字で書き写しをしていた。今回読み返して記事の内容が如実に字体に表れていることが判明。『ほつこり、穏やか』な記事には丁寧な字で、「悲惨」なものは段々小さく、「怒り」の記事には乱暴な字で書いている。自分を単純と笑う他ない。

その中に忘れられない記事がある。二〇一三年八月十六日付「全国戦没者追悼式に戦没兵の父母はなく妻も十六人になった。記憶する人も死に絶えた時、死者は真に死ぬという」。そんな戦没者の方やその時代を生きた方々の手紙や日記を読み解き、その思いを皆で分かち合うことの大事さを再確認した。一人でも多くの日記を読み解こうと思う。

今年も終戦の日を迎える。日記を開いて小さくこぶしを握った……。

(中野 祐子)